

メモリアルイヤーは永遠にくりかえす…

鶴は千年、亀は万年、百年ぐらいは若い、若い

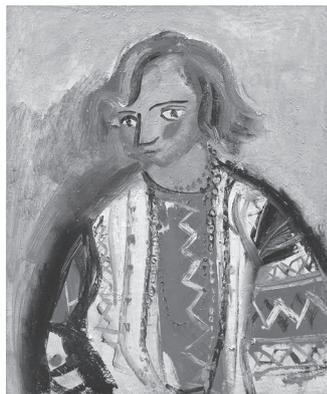
最近、創立や誕生などから何周年日かを謳った記念イベントが多い。平成30(2018)年は明治150年であったほか、大阪にちなんでは、中央公会堂の開館100年目の年であったし、天才画家・佐伯祐三(1898~1928)の生誕120年でもあった。

佐伯については美術館での回顧展がなかったのが残念だが、約50点も作品を所蔵しながら建設が遅れていた中之島の新美術館が、ようやく建設にむけて進み出した。大阪市制100周年記念事業の「大阪市立近代美術館(仮称)」として計画された美術館である。来年は、大阪市が誕生した明治22(1889)年から130年目でもあり、30年を隔てて計画はようやく動き出した。

また、プライベートな話だが、平成30年に私は還暦を迎えた記念の年であった。私の生まれた昭和33(1958)年には東京タワーができ、大阪でもフェスティバルホールや難波の新歌舞伎座が建った。小学校や中学時代には、東京オリンピックとEXPO'70大阪万博があり、浦沢直樹の『本格科学冒険漫画 20世紀少年』の主人公たちと同世代となる。平成にはバブル崩壊から阪神淡路の大震災、オウム事件があり、21世紀が到来した。

記念に名前の「節也」を、大阪人らしく「摂津爺」に変えようかとも思ったりもするが、還暦ともなると若い時分よりも過去をふりかえるためのハシゴが高くなっている。小学生のころは、戦時中の話を親から聞いても遠い世界に思えたが、今は60年の人生の長さと比較して、生まれるわずか13年前に戦争が終わった事実をリアルに感じるようになった。こどもの時は低くて遠くが見えなかったのが、馬齢を重ねたことで、軒や屋根を越えて、遠い時代が身近なものとして見渡せるようになったのである。

メモリアルイヤー、人間が「記念年」を設けるのは、御先祖の業績をいわば「法事」として社会で共有するようなものかもしれない。同時に、個人個人の歴史や人生に対する時間のもの差し



一般公募で館名が決まった「大阪中之島美術館」が所蔵する佐伯祐三『ロシアの少女』油彩・カンヴァス 1928年



1989年、近畿化学協会70周年記念事業の「化学大博覧会—わくわくハイテクランド」のテープカット。中央はノーベル賞受賞の福井謙一博士。提供・近畿化学協会

や感性を、鋭敏にさせてくれる。

話をつづけると、新年平成31(2019)年は、靱公園の大阪科学技術センタービルに本拠を置く、一般社団法人「近畿化学協会」が設立されて100年になる(通称キンカ、会長・江口太郎大阪大学名誉教授)。

「化学工業の発祥地である大阪に、化学に係わる人々の集える場をつくろう」と関西在住の旧帝国大学化学系出身者約100人が創立した団体で、大正末、来日したノーベル化学賞フリッツ・ハーバー博士(1868~1934)の歓迎講演会を開催したり、現在も化学の発展普及に様々な活動を展開している。

同会の発足式は、大正8(1919)年1月18日に中央公会堂で開かれた。公会堂の開館は大正7(1918)年11月17日なので、オープンの数ヶ月後、真新しい公会堂で創立されたのである。その縁もあって平成31年、100年前と同じ1月18日、100年前と同じ中央公会堂で「創立100周年記念式典市民公開記念講演会」が開かれ、脳科学者の茂木健一郎さんと私が講演する。一般参加も協会のホームページから申し込むことができる。

同協会は、難しい専門的な話だけではなく、市民への化学の普及を意識し、文理融合を推進している。なんの因果か文系の私が講演会の前座をつとめさせていただくわけだが、開館100年を終えた中央公会堂での創立100年の記念式典で、還暦6歳の私が講演するというのにもこだわりを感じる。

それにしても、翌2020年はEXPO'70大阪万博の50周年、翌々年の2021年は大阪大学創立と大阪城天守閣の復興90周年である。忘れることなく歴史に「目覚めよ」と呼ぶ声のするメモリアルイヤーは、毎年、ネタを欠くことがなく、なにやら忙しい。

筆者プロフィール

橋爪節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長/大学院文学研究科教授。1958年、大阪生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂—なにわ 知の巨人—」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ—増殖するマンモス/モダン都市の幻像—』(創元社)など。